

電気泳動学会創立 40 年記念誌

目 次

第 一 部

電気泳動学会四十年の歩み	平井 秀松・島尾 和男	1
--------------	-------------	---

第 二 部

〔学術論文〕

乳酸脱水素酵素サブユニット欠損症	菅野 剛史	19
蛋白質の等速電気泳動の理論	島尾 和男	31
α -フェトプロテインのレクチン親和電気泳動における二、三の問題点	武田 和久	41
血清蛋白質電気泳動用緩衝液の設計	右田 俊介・島尾 和男	47
ヒト α_1 -microglobulin の基礎的研究—その現状と今後の課題	河合 忠・伊藤 喜久	63
二次元親和電気泳動法による抗体の多様性の分析	竹尾 和典	75
モノクローナル抗体を用いて見いだした 2 種のヒト消化器癌関連抗原	谷内 昭・今井 浩三	87

第 三 部

〔随 想〕

電気泳動学会創立 40 周年を祝して	島蘭 順雄	95
電気泳動学会 40 周年によせて	太中 弘	96
電気泳動学会創立 40 周年に想う	山崎晴一朗	98
電気泳動学会の思い出	大川 公康	100
滲濾出液に取り組んで	村越 康一	101
電気泳動学会と私	阿部 正和	103
電気泳動学会についての追想	三好 和夫	106

創立 40 年記念に因んで—精度管理の面より—	富田 仁	109
電気泳動法とリポ蛋白の研究（電気泳動学会の思い出）	古賀 俊逸	111
病院病理医と電気泳動学会	高柳 尹立	114
思い出	緒方 正名	116
二回の電気泳動学会総会に参与して	伊藤 忠一	119
泳動回帰	高月 清	122
Tiselius の電気泳動法との関わり	島尾 和男	124
Joachim Kohn 博士と京都の思い出	林 泰三	126
40 周年によせて	長谷 克	129
そのそばを通り過ぎていた！	赤井 貞彦	131
私の電気泳動法へのかかわり	三輪 史朗	133
電気泳動さん有難う	池本 卯典	136
電気泳動の歴史	井上 勤	139
電気泳動法との出会い	河合 忠	141
電気泳動学会での思い出	櫻林郁之介	144
40 年記念を迎えて	芝 紀代子	147
電気泳動学会の創立 30 年からの 10 年と二次元親和電気泳動法の開発	竹尾 和典	149
電泳学術集会 10 年の回顧	屋形 稔	151
汗まみれの講習会	小林 貞男	153
電気泳動学会とともに	大谷 英樹	155
電気泳動学会創立 40 年によせて	吉岡 尚文	157
チャールストンから始まった	大橋 望彦	159
西暦前の免疫学	右田 俊介	162
誰か知らん明鏡の裏	坂岸 良克	165
見逃していた clear line	松橋 直	168

序 文

電気泳動学会創立 40 年記念誌によせて

電気泳動学会は 10 周年、20 周年、30 周年の区切りをつけつつ歩み来たり、今日 40 周年を迎えることとなった。

思えば、昭和 24 年本会の設立にたずさわった人達の殆どが 20 歳代、ないし 30 歳そこそこであった。周囲をおもんばかりの智恵もなく、ただ前進あるのみの連中がやった、がむしゃらな設立作業であった。昭和 25 年、電気泳動研究会の発足に当たり初代会長となられた児玉桂三先生はこの若い連中のなすがままにまかせ、指示、命令をすることは殆どなかった。我々がお伺いをたてただけ口をきかれたが、うん、それでいいだろうといわれるのが常であったように思う。ただ一度だけ私の記憶に残るのは、本学会も日本医学会の分科会としたいと申し上げたところ、「そんなものには入らんでええ」と一言だけいわれたことである。今考えれば、本学会は医学のみならず広い分野の人達の集まりでなければならないということを夙に考えて居られたのである。

機関誌に「生物物理化学, Physico-Chemical Biology」の名をつけたのは私だったと思う。児玉会長は「うん」といわれた。御満足だったのだと思う。その機関誌も Vol. 34 を迎えようとしている。

10周年前後のことであっただろうか。一体この学会はいつまで続くのだろうか？一体いつまで私はこの学会をやらねばならぬのだろうか？という不安と愚痴めいた言葉をつぶやいたことがあった。「一生だよ。君は死ぬまでやるんだ」といったのは阿部正和君だったと記憶している。

学会は私の不安をよそに思いがけぬ発展を遂げ、今日に到った。私と島尾和男君の二人三脚を中心とした多くの若い人達の合作であったといったらおこがましいであろうか。この合作の背後には、藤井暢三、宮本 璋、杉本良一、石井 進などの諸先達の適切なコントロールがあった。いずれの諸先生も物故された。永年学会本部は東大医学部生化学教室におかれたが、児玉桂三教授のあとをついで東大医学部生化学講座を担当された島蘭順雄名誉会員が今日なお御壮健で本会に出席されていることは誠に喜ばしい。

ここ 40 年ないし 30 年来の本学会の戦士達がずらりと筆を連ねてのこの 40 年誌である。懐かしいことではないか！

40 周年は回想と反省の好機ではあろうが、50 年、60 年を目指して突進するスタート台でもある。本誌は本会をここまで育んだ諸先輩、同僚の労への讃歌でもあるが、むしろ、次代を背負う若い会員への激励をこめて上梓するものであることを記して序とする。

平成元年十月吉日

平 井 秀 松 記 す